小学校体育科における「cheer spirit」を育む実践的研究

－小学校第５学年チアリーディングの教材づくりを通して－

吉田　那々子（愛知教育大学）

１．目的

本研究の目的は､チアリーディングを教材化し、「cheer spirit」を育む授業実践について検討することであった。

２．研究方法

１）　実践の対象者は公立Ａ小学校第５学年４学級の児童であり、2023 年９月から 10 月に実施（教育課程上は体ほぐしの運動として、３時間扱いとした）実践を検討した。

２）　検討方法は､まず本研究の｢cheer spirit｣をチアリーディングを通して育まれる能力と定義して [1)]、小学校体育科の目標に照らして５つの視点を検討の枠組みとした。次に、授業実践で得られたデータ（教師の授業記録、児童の振り返りシート、授業映像）より実践記録を作成した。そして、その実践記録から表１の５つの視点で児童の学びの内実を考察した。

表１　５つの視点と学習状況の例

視点	学習状況の例
①笑顔	仲間と相談して跳び方を考えたり笑い合いながら取り組んだりする
②マナー	他クラスの演技を見て、手拍子や拍手をする
③リーダー性	列を綺麗にしたいと考え、仲間に声をかける
④協調性	「このようにした方がやりやすいね」と仲間に声をかけている
⑤信頼	仲間のことを信じて後ろに倒れることができている

３．結果と考察

１）　第１時では、子供たちがチアリーディングのイメージをもつことができるように、競技チアリーディングの動画視聴をした。しかし､｢怖い｣という感想をもつ児童もいた。その後､｢モーション｣｢ジャンプ｣｢スタンツ｣を中心として、今持っている力で取り組める手軽で簡易化した運動を実施した。｢スタンツ｣は土台となる側と上に乗る側の両方を経験することで、互いの役割を理解する契機となった。チアリーディングの教材化には誰でもチアリーダーとなれることや協調性を学ぶ機会があったと考える。

２）　第２時では各学級での児童の案からポン文字に取り組み、第３時ではミニ演技の発表を実施した。ポン文字では活動の停滞する場面もあったが、性差や体力差、能力差の有無にとらわれない活動となった。一方で、スタンツは身体接触が伴う等の理由から男女別に行うことになった。ミニ演技会では演技する側・みる側が互いに「応援する - 応援される」の相互の交流もあった。

４．結論

本研究における授業実践では５つの視点に関わる学びを検討することができた。チアリーディングの教材化は、役割を自覚することを発端としたリーダー性と協調性を育むことに期待ができると考える。一方で、ポン文字の教材化では活動の停滞、スタンツの教材化では性差や体力差、能力差をどのように乗り越えていくかという点においても教材開発の余地がある。また、本実践では本授業が楽しくなかったと感じた児童もいた。今後の課題としたい。

５．主な参考文献

１）日本チアリーディング協会　チアリーディングとは.
https://www.fjca.jp/cheerleading/contents_01.php（2023.2.20 閲覧）